

光の王国 番外編 2

殺意の女神たち

番外編2 殺意の女神たち

彼 エイシス・コット・シルカー二は、生命の危機を感じていた。

生まれ育った村を出て、傭兵を生業とするようになって十五年以上になる。その間、危険とは常に隣り合わせの人生だったといってもいい。それでも、いま彼が置かれているほどの危機は、そうそうなかった。

彼は、追いつめられていた。

目の前に、ひとりの女性が立っている。

美しい女性だった。そして、静かな笑みを浮かべている。

まともに戦っても勝てない……本能的にそう感じていた。

あるいは、魔法の助けを借りればなんとかなるかもしれない

口の中で、呪文を唱える。

四大精霊の魔法。

自然界に存在する精霊だけではなく、それ以上

の数の精霊を強制的に召喚してより大きな力を使用する、きわめて珍しい魔法。

エイシスは、大陸中でも数十人しかいないといわれる、その魔法の使い手の一人だった。

呼びかけに応じて、精霊たちが集まってくる。

エイシスに、力をもたらす。

しかし

「天と地の精霊、力を司る者たちよ。私の呼びかけに応えよ……」

女が口を開いた。澄んだ美しい声が、その唇から発せられる。

それは、精霊たちを魅了する不思議な力を秘めた声だった。

一瞬のうちに、エイシスが召喚した精霊はすべて奪われていた。

彼の元に届けられるはずだった魔力が、その女へと注がれてゆく。

「あなたの、精霊に対する支配力ってこの程度？ つまらないわね。観客もいるんだから、もっと

抵抗して見せなさいよ」

嘲る声すら、美しかった。

それは、限りない危険を秘めた美しさだった。

* * *

ハシユハルドは、陸路と水路、ふたつの大きな交易路が交わる土地に発展した、大陸でも有数の都市だった。

大陸中から集まってくる商人たちや、その護衛の傭兵たち。街はいつも大勢の人間で賑わっている。

そんな街の中の、それほど大きくもない通り。そこにある一軒の小さな酒場は、まだ陽も高い時刻だというのに、ずいぶん大勢の客が入っていた。

客層は基本的に若い男が多い。他の店なら、こんな時間から飲んでるのは大半が隠居した年寄りと相場が決まっているのだが。

実は彼らの目当ては、この店で働いている娘

だった。

店の主人ウエイズ・アル・セイシエルの養女で、今年十六歳になったリユーリイ・リン。

長い金髪と深い緑の瞳を持ったこの少女は、ハシユハルドともいわれる評判の美少女だった。そのくせ明るく気さくな性格で、親しみやすい。

外見に似合わず少々気が強くはあったが、とにかくハシユハルドの若い男たちの憧れの的なのだ。

しかし今日は、少し様子が違っていた。いつもならリユーリイに見とれてデレーとしている男たちの目が、妙に険しい。

その嫉妬まじりの視線は、席について酒をおおっている一人の大男に注がれていた。

その赤毛の大男は、時々この店に姿を見せる。

リユーリイはその男の顔を見るたびに喧嘩腰で突っかかっっていくが、しかし、彼女が相手のことを憎からず思っていることは誰もが知っていることだった。

その上、リユーリイの純潔を奪ったとも噂されている。間違はなく、今のハシユハルドにおいて

もつとも大勢の恨みを買っている人物だった。

しかし最近では、彼に喧嘩を売る人間もほとんどいない。その男は傭兵を生業としており、ひとたび剣を抜けば、このあたりの荒くれ共を歯牙にもかけない実力の持ち主だったから。

何年か前には、この街に攻め込もうとしていたアルトゥル王国の精鋭一万騎以上を相手にたった一人で立ち向かい、ついには敵将を討ち取ってその軍勢を追い返したとさえいわれている。

噂には尾鰭がつきものだから、どこまで信用しているのかわからないが、「ひよつとしたら事実かも」と思わせるほどの強さを持っていることは確かだった。

だから、リユーリーの取り巻きたちにできることといえば、その男を恨めしそうに睨みつけながらヤケ酒をあおるくらいのものであった。

* * *

エイシスは上機嫌で、ビールを口に運んでいた。

最近いろいろとごたごたしていて、この店を訪れるのも久しぶりだった。だから、今夜のことを考えるとつい顔がにやけてしまう。

リユーリーはまだ十六歳だが、会うたびに女らしく、そして美しくなっていく。

十歳の頃から彼女を知っているだけに、感無量だった。

大人になったら結構な美女になるとは思っていたが、正直ここまでとは予想していなかった。うれしい誤算だ。

子供の頃に唾を付けておいて本当によかった。

かなり気の強いところがあるので、素直に彼に甘えたり媚びたりすることはない。が、そんなところがかえって可愛い。彼はむしろ、じゃじゃ馬の方が好みなのだ。

エイシスは自他共に認める女好きだが、これまでに手を出してきた無数の女たちの中でも、リユーリーは間違いなく三本の指に入る「お気に入り」だった。

ちなみに、お気に入りのうちのもう一人も、い

ま同じテーブルに着いている。

長い銀髪を伸ばした美しい女性。意志の強さを
感じさせる凛とした瞳が魅力的だった。

フェイリア・ルウ・ティーナ。今年二十七歳に
なるエイシスよりも年上だが、外見はどう見ても
二十代半ばでしかない。彼女とはエイシスが十三
歳の頃からの知り合いで、彼の初恋の相手でも
あった。

フェイリアとリユーリイは、エイシスがリユー
リイと出会う以前からの知り合いである。リユー
リイの実の両親がまだ健在だった頃、一時期彼女
の家に滞在して家庭教師のようなことをしていた
そうで、今でも仲がいい。

ある意味、恋敵といえないこともないはずなの
だが、そんな様子は微塵もない。だから、この店
で三人が顔を会わせることも、さほど珍しいこと
ではなかった。

エイシスが

（これは、今夜は三人でお楽しみ……か？）

などとふざけたことを考えているのを知ってか

知らずか、二人は楽しそうに談笑していた。

エイシスの楽しいひとときは、一人の客が店に
入ってきたことよって終わりを告げた。

「あら？」

たまたま入口の方を向いていたフェイリアの口
から、小さく驚きの声が漏れる。エイシスがその
視線を追って背後に顔を向けようとした瞬間、

「死いねええつつつつつ！」

裂帛の気合いとともに、剣が振り下ろされた。

彼が着いていたテーブルがまつぶたつになる。

「な……っ？」

反射的に身をかわしたから辛うじて助かったの
だ。でなければ、両断されていたのはテーブルで
はなくエイシスのはずだった。

慌てて立ち上がったエイシスの前に、一人の少
女の姿があった。

鮮やかな、濃い金色の髪が揺れる。

珍しい金色の瞳には、怒りの炎が燃えさかつて

いた。

手には、赤い光を放つ剣を握っている。それは、魔力が刃の形に結晶化したもので、それを持つ者の卓越した力の証明だった。

「ファーリッジ・ルウ……？」

その名をつぶやく。

ファーリッジ・ルウ・レイシャ。外見はリユーリイと同世代の年齢の少女でしかないが、この大陸でも最高の力を持った魔術師の一人だ。

その彼女が、全身から怒りのオーラを発してエイシスを睨め付けている。

「殺してやる……、殺してやる！」

目つきが、尋常ではなかった。

エイシスはすぐに、ファージの怒りの原因に思い当たった。そして同時に、彼女が紛れもなく本気であることを悟った。

彼は一瞬の躊躇もなく、即座に逃げ出した。王国時代の竜騎士にも匹敵する力を持つといわれるこの少女と、まともに戦うつもりはなかった。しかし、ファージの動きはエイシスのそれを遙かに

凌駕していた。たちまち追いつかれ、赤い剣がうなりを上げる。エイシスは死を覚悟した。

キンッ！

硬い金属がぶつかり合う、鋭い音が響いた。

そのままであればまっぴらつにされていたはずの身体は、傷を負ってはいなかった。

まるで磁器を思わせる真白い刃が、ファージの赤い剣を受け止めている。それは、フェイリアの持つ『竜の剣』だった。

「……邪魔する気？」

低い声でファージが言う。

「ちよつと、ファーリッジ・ルウ。いったいどういっつもり？」

額に冷や汗を浮かべたフェイリアが訊く。

「どうもこうもあるかっ！ こいつを殺してやるっ！」

常人よりも長い犬歯をむき出しにして、ファージが叫んだ。

「理由を説明しなさい！ でなければ、私が相手よ」

「理由？ 決まってるじゃない！」

吐き捨てるように言うと、床に尻餅をついているエイシスを剣で指した。

「この外道が、私のナコを慰み物にしたんだっ！」

しん……

その場が、静寂に包まれた。

時が凍りついたかのような静けさ。

最初に復活したのは、フェイリアだった。

「……慰み物？」

「そうさ。傷ついたナコの心につけ込んで、さんざん弄んだんだ！ 嫌がるナコを無理やり、一晩中犯し続けたんだから！」

ぴくっ。

フェイリアの眉が微かに動く。唇が小さく開かれた。

「……そう」

やっと聞こえるくらいの声で呟くと同時にヒュン！

その、白い刃が風を斬った。フェイリアの後ろ

に隠れるようにしていたエイシスの胸が浅く切られる。

「フェ、フェア……！」

「エイシス、あなたとは長い付き合いだし、あなたのことはよく知っているつもりだったけど……」

フェイリアは、静かな微笑みを浮かべていた。

ただしその笑みは、氷よりも冷たい。

「エイシス！ あなた、女好きにもほどがあるわ！ そりゃあ、ナコを気に入ってたのは知っている。でもまさか、あんな状態のナコに手を出すほどの鬼畜だったとは……」

氷の微笑は、たちまち悪鬼の如き形相に変わる。

竜の角から削り出したといわれる竜騎士の魔剣

が、容赦なくエイシスを襲った。

「ま、待て！ 話せばわかる！ 落ち着いて話し合おうじゃないか！」

間一髪で刃をかわしたエイシスが、片手を上げてフェイリアを制止する。

「話し合う？ なにを？ いっぺん死んできなさ

い。話ならその後で聞くわ」

冷たい声だった。なんとなく、内部に燃えさかる溶岩を封じ込めた氷の塊、といった雰囲気を持たせている。

目が、本気だった。

外見は確かにはつとするほどの美女だが、怒らせたときの怖さでは、間違いなく大陸中でも五指に入る。

(こ、殺される……)

エイシスは、全身から脂汗が噴きだすのを感じていた。

ファールリッジ・ルウ・レイシャとフェイリア・ルウ・ティーナ。どちらか片方だけでも、敵に回すには危険すぎる相手だ。大陸でも最高クラスコルシヤの魔術師二人が、彼の命を狙っていた。いくらエイシスが凄腕の傭兵でも、これではあまりにも分が悪すぎる。

(に、逃げ道は……)

緊張した面持ちで、店内に視線を走らせる。

店の入口側に立つのはファージ。裏口側には

フェイリア。

逃げ道はなかった。

(かくなる上は……自力で逃げ道を作るしかない！)

魔法で壁をぶち破って。

そう考えて、口の中で静かに呪文を唱える。

四大精霊の魔法。精霊を召喚するための呪文。

エイシスがやるうとして、に気付いたフェイリアの口元に、微かな笑みが浮かんだ。

「天と地の精霊、力を司る者たちよ。私の呼びかけに応えよ……」

フェイリアが口を開いた。澄んだ、美しい声がその唇から発せられる。

それは、精霊たちを魅了する不思議な力を秘めた声だった。

一瞬のうちに、エイシスが召喚した精霊はすべて奪われていた。彼の元に届けられるはずだった魔力が、フェイリアへと注がれてゆく。

「あなたの、精霊に対する支配力ってこの程度？」

嘲る声すら、美しかった。

それは、限らない危険を秘めた、美しさだった。フェイリアは、精霊魔法に関しては大陸^{コルシヤ}最高の使い手だった。エイシスの魔法も、彼女から学んだものなのだ。かなうわけがない。

「つまらないわね。観客もいるんだから、もっと抵抗して見せなさいよ」

フェイリアがちらりと視線を移す。

店の隅では、他の客たちがテーブルの陰に隠れながら様子をうかがっていた。

エイシスがちょっとした女が店に乗り込んできて、騒ぎになるのは日常茶飯事だった。常連たちは慣れたもので、騒動が始まると同時にテーブルの陰に隠れて見物している。手には相変わらず酒の器を持ったままだ。

ハシュハルドのアイドルを奪った憎き男が困る様を見物するというのは、最高の酒の肴だった。

エイシスは、孤立無援だった。

絶体絶命の危機に置かれていた。

逃げ道はなく、魔法で逃げ出す術も奪われた。

全身に殺気をみなぎらせたファージとフェイリアが、じりじりと間合いを詰めてくる。

エイシスは冷や汗を浮かべながら、同じ分だけ後ずさる。

どん！

背中が、なにかにぶつかった。

振り返ると、ファージが入ってきたときには厨房にいたはずのリューリイが立っている。

「傭兵……」

大きな、深い緑の瞳が彼を見つめている。

「……リュー、助けてくれ」

エイシスが珍しく弱音を吐いた。リューリイが取りなしてくれば、ファージはともかくフェイリアは怒りを収めるはずだった。

「ねえ、傭兵……」

リューリイがにこ微笑む。

ハシュハルドの男たちを魅了する、天使の笑顔だった。

「……ねえ傭兵。ナコって誰？」

エイシスの顔から血の気が引いた。リユーリイの手の中にあるものが視界に入る。

リユーリイは、すつと手を上げた。首に刃が突きつけられる。

それは、リユーリイのような美少女が持つにはあまりにも不釣り合いで物騒な代物、プロの剣士が持つ両手用の長剣だった。

「リ……リ、リユー……」

「そりゃあ、フェア姉のことは仕方ないと思ってるよ。あたしと知り合う以前からの関係なんだから。でも、ナコって誰？ 今度はどこで引っかけた女よっ？」

剣を握る手に力が入り、切っ先が喉に触れる。

「あなた、最近ちよつと調子に乗ってるみたいだし。すこーし、お仕置が必要みたいね？」

背後から聞こえたそんな台詞と同時に、フェアリアの柔らかな手がエイシスの肩に置かれた。

* * *

買い物から帰ったこの店の主人、ウエイズが見たものは

原型を留めぬほどに荒れ果てた、彼の店だった。テーブルも椅子もボロボロ。壁は穴だらけで、あちこちに焼け焦げも見える。

ただひとつ無事なテーブルの周りに三つの椅子を並べて、三人の美しい女性が、不機嫌そうな顔でお茶をすすっている。

うち一人は、彼の知らない人物だった。

その足元に、全身血まみれの大男が横たわっている。

「……ふむ」

ウエイズは一目でおおよその事情を察した。

もともと寡黙なウエイズは、これくらいで取り乱すようなことはない。

それに、こんなことはよくあることだ。まあ、普段よりも少しだけ、店と、そしてエイシスのダメージが大きめだということだけのこと。

生死不明の状態で床に倒れている男に向かって、「修理代はお前にツケておくぞ」

とだけ言つと、店の奥へ消えていった。

あとがき

本編が来年までおあずけ、ということでは、『光』の新作を待ちこがれている読者のために、番外編をお届けします。

『金色の瞳』の後日談ですが、ある意味『リユー・レイ・リン』の後日談的な意味合いもあります。そういえば、リユーレイの登場はずいぶんと久しぶり。

この作品は、『金色の瞳』の後に、愛読者の一人から頂いたご意見をヒントに思いついたものです。

『インタルードで、ファージ×エイシスなんてどうですか？「あんだ、奈子に何したのよ！」なんて、結構激しいケンカ（漫才か？）できるかも』と。

インタルードは原則として「奈子×由維」の物語なので、番外編でやってみました。フェイリアやリユーも登場させたところ、ファージとエイシ

スのどつき漫才ではなく、ただただエイシスが袋叩きにされる話になってしまいました。

本編や外伝ではそれなりにカッコイイところもあって、女性読者を中心に人気の高いエイシスですが、今回はひたすらやられ役。フェイリアやリユーレイに対しては頭が上がらないんですね、この人。なんとゆるーか……私的には「ざまーみる！」って感じ？（笑）

ところで今回、奈子が登場しません。このとき彼女がなにをしていたかというところ……、多分、家で由維とじゃれ合っていたのでしょう。

そういえば、最初の構想ではハルティ様も登場させようかと思っていましたよ。でも彼の場合、話を聞いたらマジグレしてしまいそうだから（笑）。ここでエイシスが殺されてしまうと、第八話以降の展開に支障が出ますからねー。

では最後にこれからの予定ですが……
相変わらず未定。

『光』の本編はまだまだ先だし、それ以外の長編も今のところ予定なし。そのうち、インタルードを書くかもしれませんが。

それでは、次回作は気長にお待ちください。

一九九九年九月 北原樹恒

kitsune@mb.infoweb.ne.jp

創作館ふれ・ちせ

<http://plaza4.mbn.or.jp/~kamuychep/chiron/>

閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。